

## 備忘録ないしは切り抜き帳(その203)

[2022年5月6日(金)]

○今朝の東京新聞社説『戦争と平和を考える トルストイを読み直す』を以下に転載させて頂く。「ロシアの文豪レフ・トルストイ(1828～1910年)の小説「戦争と平和」がじわり売れています。文庫本の新訳が昨年完結した光文社によると、ロシアによるウクライナ侵攻後、書店からの注文がほぼ2倍になったそうです。19世紀初め、フランスの皇帝ナポレオンによるロシア遠征。その経緯と戦争に巻き込まれたロシアの人々を描いた名作です。戦争はなぜ起きるのか。人生をどう生きるべきか。3000ページ超の長編作品には作家がいくつもの問いに誠実に向き合った跡が刻まれています。今、この本を手にする読者は、ウクライナの戦場と重ねずにいられないでしょう。戦争の愚かさや平和の尊さが次々と目に飛び込んでくるからです。

◆**プーチン大統領の「誤読」** この小説では、ロシアは侵略される立場です。若い伯爵は戦場で砲弾を至近距離で浴び、フランス兵と生身でつかみ合って死線をさまよいます。見渡せば同僚は血だまりの中で死に、瀕死のまま見捨てられた兵士もいます。「もう彼らはこんなことをやめるだろう、自分のしでかしたことにぞっとすることだろう！」伯爵の心の叫びです。このロシア遠征はトルストイが生まれる前の出来事ですが、トルストイは20代でクリミア戦争(1853～56年)に従軍し、戦場を肌で知っていました。伯爵のせりふは作家の実感に違いありません。ウクライナの悲惨さは小説を超えているとも言えます。殺傷力の高い戦車やミサイルに加え、化学兵器の使用も疑われています。小説では軍隊同士の戦いですが、今起こっている現実の戦争では民間人が虐殺され、強制連行されています。後年非暴力主義に達したトルストイです。母国ロシアの蛮行を目の当たりにすれば何と言うでしょう。「あらゆる小説の中で最も偉大な作品」(作家サマセット・モーム)とも評された「戦争と平和」ですが、光文社版を翻訳した望月哲男・中央学院大学特任教授によると作家の死後、ソ連共産党の政権下ではその平和思想は顧みられず、小説に描かれた祖国防衛の一面だけが国威発揚のため強調されたそうです。戦争文学が反戦でなく、過激な愛国主義へとねじ曲げられることは、今のロシアでも続きます。同国のネットメディアによると、他ならぬプーチン大統領が最も影響を受けた作品に「戦争と平和」を挙げているのです。大なる誤読と言わざるを得ません。プーチン大統領よ、今すぐ読み直せ、と言いたい。息子を失った父母が、嘆き悲しむ場面を。敵だったロシア兵とフランス兵が、友人として心通わす場面を。そして、侵略者ナポレオンがいかに滑稽な存在として描かれているかを。

◆**ロシアに反戦伝えねば** 「また戦争。誰にも無用な、何の理由もない苦難、虚偽…」1904(明治37)年「悔い改めよ」と題した論文が英国の新聞に載りました。日露戦争で戦火を交える日本とロシアを批判し、停戦を説く内容です。著者は75歳のトルストイでした。指導者は危険を冒さず、国民を戦場に送っている。文明が危機に直面する今、局部的戦争も世界的災厄をもたらしかねない。軍人も外交官も皇帝も、職務の論理に従う前に一個人として悔い改め、「殺すな」の教えに返れ、と。この「説論」は、日露戦争の終結を早めたとは言いがたいものの、後のインド独立運動の指導者マハトマ・ガンジーを勇気づけ、非暴力を掲げた植民地解放につながりました。トルストイに倣い、命の尊さをロシア国民に粘り強く説き続ける愚直さこそが今、世界平和のために求められています。民主主義、自由、平等、人権尊重…。おびたしい犠牲の上に、人類がたどり着いた普遍的な価値観を世界に広めていくしかないのです。情報統制や人権弾圧が厳しいロシアでも反戦を表明する人々は存在しますし、国外への脱出者も増えています。支援や連帯のために知恵を絞りたい。「ロシアの皆さん『戦争と平和』を読み直してください」こんなメッセージも決して無駄ではないと信じます。」

○同じく今朝の朝日新聞天声人語『大祖国戦争』も、以下に転載させて頂きたい。「今年の本屋大賞に選ばれた小説『同志少女よ、敵を撃て』を読んだ。作中、実在したソ連の狙撃手リュドミラ・パブリチェンコが登場する。主人公の少女らがあこがれる伝説的な女性兵士だ。▼ウクライナ出身。第2次世界大戦に志願し、前線で309人ものドイツ兵を射殺する。その武名をソ連は軍事動員に利用した。狙い通り、若い女性が狙撃学校の門をたたき、多くは戦場で命を落とす。負傷したパブリチェンコは政府の命令で欧米を回り、支援を訴えた。▼ソ連の英雄に祭り上げられた彼女の故国はいま、ロシア軍に蹂躪されている。連日届く映像には女性兵士の姿も多い。捕虜交換で解放されたウクライナ兵の中には、妊娠5ヵ月の女性もいたという。傷つき命を落とす者も多いだろう。小説の輪郭と重なり、何ともやりきれない気分になる。▼ソ連は対独戦を「大祖国戦争」と名付けた。「祖国戦争」と呼ばれた19世紀の対ナポレオン戦と重ね合わせ、民衆の愛国心を鼓舞するためだ。多大な犠牲を払いナチスを打ち破った記念日として語りつがれる5月9日は、ロシア最大の祝日という。▼この日がいま世界の注目を集める。「ウクライナに正式な宣戦布告をし、攻勢を強めるのではないか」

英米ではそんな観測が飛び交う。ロシア高官は「たわごとだ」と退けるが、どこまで信用できる発言か。▼  
ひところ期待を込めた停戦交渉も音沙汰が無くなった。戦勝記念日に砲火がやむという展開には、もう一筋の光すら差さないのか。」

[2022年5月7日(土)]

○今朝の東京新聞, ぎろんの森『「戦争と平和」を考え続けて』を以下に転載させて頂く。「新型コロナウイルス感染症を巡る行動制限のない久々の大型連休でした。読者の皆さんもそれぞれの過ごし方をされたことでしょう。東京新聞社説は、毎年掲載している「憲法記念日に考える」「こどもの日に考える」とともに、4回にわたり「戦争と平和を考える」をテーマにお届けしました。2020年の新型コロナの感染拡大後は、2年にわたりコロナに関する社説を連載していましたが、今年は連載テーマを切り替えました。コロナ禍はまだ終息していませんが、ロシアによるウクライナ侵攻を機に戦争と平和について深く考えなければならない、という私たち論説室の問題意識の表れです。2日掲載の「朝鮮半島の火種は今も」では、海を隔てた朝鮮半島では戦争がまだ終わらず、国連軍の後方司令部が置かれている日本も戦争に深く組み込まれている現実を伝え、こう訴えました。「軍備増強よりも戦争が起きない世界をどうつくるのか、北東アジアに残る緊張と対立の芽を摘むことこそが最優先課題なのです」読者から「理想論すぎる」との指摘の一方で「共感を覚えた」「北東アジアの平和にとって朝鮮戦争の終結が最優先課題との認識が共有されるよう、新聞が声を大にして訴え続けてほしい」との意見をいただきました。読者の応援は心強い限りです。憲法記念日の社説では、20世紀の戦争で多数の犠牲者が出たことを紹介し、日本国憲法の基本的人権の保障という条文には戦争で亡くなった死者たちの声が生きていて、次の時代に良心のバトンをつなぎたいと訴えました。翌4日の社説では、施行75年を迎えた平和憲法に基づく「専守防衛」政策が絵空事ではなく、日本への信頼を高め地域の安定に資する外交・安全保障政策として機能してきたと指摘しました。中国や北朝鮮の軍備増強やロシアのウクライナ侵攻を受け、日本も憲法を改正して軍備増強すべしと叫ぶ人が多くなったように感じます。しかし施行75年がたち、すでに私たち日本国民の血肉と化した憲法の平和主義が過去の戦争の反省に立つことを忘れてはなりません。執拗と言われようとも、本紙社説は平和主義の大切さと有用さを訴え続けます。(と)」

[2022年5月8日(日)]

○今朝の東京新聞社説『週のはじめに考える 何が「帝国」へ誘うのか』を以下に転載させて頂く。「ロシアのウクライナ侵略が続いています。核兵器の使用をちらつかせ住民殺戮も伝えられています。その非道に日本など各国で非難が渦巻いています=写真。◆ロシア非難に温度差 ただロシア非難には濃淡があります。特に中東では欧米と一線を画す国が少なくありません。国連総会は先月、人権理事会でのロシアの理事国資格を停止する決議を採択しました。この投票でアラブ諸国では親米国の湾岸諸国やエジプト、ヨルダンなどが棄権しました。非アラブのイスラエルや北大西洋条約機構(NATO)加盟国のトルコは賛成しましたが、ロシアへの非難を慎み停戦交渉の仲介に奔走しています。こうした温度差はどこから来るのか。原油価格維持や穀物確保の狙いに加え米国の中東離れが進みロシアを軽視できないという安全保障上の思惑があります。欧州やウクライナへの不快感も無視できません。同じ難民でも、アラブ人とウクライナ人への欧州の対応の差は歴然です。ウクライナは在イスラエル大使館を聖地エルサレムに移転する意向ですが、ここは国際的な係争地です。移転はイスラエルによる一方的な聖地の地位変更に加担する行為でイスラム諸国は看過できません。もっと根源的な理由もありそうです。現代世界のルールである主権国家の論理に対する信頼の揺らぎです。主権国家は領土と国民の概念を基に西欧で生まれ、国家間の関係は1648年のウェストファリア条約で確立しました。主権平等と内政不干渉が原則です。ロシアが非難される最大の根拠はこのルールに違反したからです。しかし中東の国境は多くが西欧の植民地支配の産物です。他者から押し付けられたものにすぎません。さらに近年、国境を揺るがす現象が相次いでいます。それは「帝国」再興の兆しです。一例は2014年にイラク、シリア両国の一部を支配したイスラム教スンニ派の過激派「イスラム国(IS)」です。イスラム教の世界観に近代国境はありません。ISはかつて栄えたウマイヤ朝、アッバース朝を想起させました。トルコのエルドアン政権はオスマン帝国への憧れを隠しません。地域リーダーとしての自負も旧帝国に由来します。周辺国に傀儡組織を広げるイスラム教シーア派国家イランの姿は16~18世紀のサファビー朝と重なります。「帝国」志向は中東に限りません。ロシアのプーチン政権も同じ野望に突き動かされているよ





うに見えます。東方正教とスラブ系言語の共通性を基盤に、中世のキエフ公国(キエフ・ルーシ)の復活を夢想しているかのようです。「中華民族の偉大な復興」を掲げる現在の中国にも「帝国」の匂いがします。ムガル帝国と現在のインドを重ね合わせる学者もいます。いずれも1990年代に注目された米国の政治学者サミュエル・ハンチントンの著作「文明の衝突」を思い出させます。何が「帝国再興」へ誘うのか、難題ですが要因を考えます。経済のグローバル化は国境の持つ意味を薄めました。西欧が誇る民主主義の機能弱体化も一因でしょう。その典型は米国のトランプ前政権の振る舞いです。何よりこうした動きが西欧以外で広がっている点は見逃せません。西欧生まれの論理をさほど重視できない心理には背景があります。例えばイラク戦争です。◆二重基準への不信感 米国は大量破壊兵器保有という虚偽の理由でイラクに侵攻しましたがロシアほどは非難されませんでした。イスラエルによる非人道的な占領が続くパレスチナもウクライナほど同情されません。こうした欧米の二重基準が、主権国家体制や民主主義という西欧生まれの論理に対する不信を生み「帝国」再興の気分を後押ししているように映ります。ロシアの傍若無人ぶりは非難されて当然です。戦争の原因をプーチン大統領個人の資質に求める声もありますが、日本も90年前に満州国という傀儡国家をつくり、中国を侵略しました。ロシアの侵略後、欧州各国は軍備増強へと動いています。日本も例外ではありません。しかし、力の対抗に根源的な解決は望めません。西欧中心の現行の世界秩序やシステムに傲りや問題点はないのか。侵略を非難しつつ、同時に内省すべき課題を直視すべきでしょう。歴史を画すかもしれない転換期だからこそ、冷静で客観的な考察に努めなければならないのです。」

[2022年5月10日(火)]

○今朝の朝日新聞社説『プーチン演説 許されぬ侵略の正当化』を以下に転載させて頂く。「プーチン大統領は一体歴史から何を学んだのか。かつて世界を苦しめた侵略を現代に再現させた罪深さを悟り、ただちに戦闘を停止すべきだ。ロシアはきのう、先の大戦でナチスドイツに戦勝した記念日を迎えた。77年前、周辺国への領土拡大とユダヤ人の絶滅計画を進めたドイツが降伏した。欧州を解放した当時のソ連の役割は史実として知られる。しかし後継者を自任するプーチン氏が始めた今の戦争は、当時のナチスのように隣国の人々を蹂躪する暴挙である。演説でプーチン氏は侵攻の正当化に終始した。ウクライナによる核開発といった根拠のない脅威論を並べ「先制攻撃するしかなかった」と述べた。念頭にある主敵は米国であることも言明した。米国に抗して「独自の価値観」を守るという主張には、欧米流の民主主義を拒み、自らの強権統治を貫く決意があるのだろう。「世界大戦の惨禍を繰り返させない」プーチン氏のそんな誓いは空虚に響く。この記念日に向けて核戦力による脅しを強めたことは国際安全保障への挑戦というべきだ。こうした言動の背景にはウクライナでの戦況をめぐる焦りがあるようだ。ロシア軍は3月に首都の攻略を断念し東部2州の占領に目標を変えたが、思うように進んでいない。記念日が終わった今、プーチン氏にとって政治的に節目となる時期が見えず、戦闘の長期化が懸念される。先日も住民の避難先だった学校が爆撃される惨劇が起きてしまった。日本を含むG7と呼ばれる主要7カ国の首脳は今週オンラインで話しあった。ロシアの主要な収入源である石油の段階的禁輸を打ち出したほか、ウクライナへの軍事援助を続ける方針を確認した。プーチン氏の威嚇に動じることなく、ウクライナの主権と領土を守る闘いを支えるのは当然だ。武力による一方的な現状変更を見過ごせば、国際社会の平和と安全は保てなくなる。ただ、戦力が拮抗する消耗戦が続けば、それだけ流血と破壊が深まり、核を含む大量破壊兵器の使用リスクが高まることにもつながる。軍事支援だけで出口が見えるわけではない。国連安保理は先週、開戦後で初めてロシアを含めた全会一致の意見表明をした。平和的手段で紛争を解決する義務を「議長声明」で再確認した。常任理事国の米国、中国、英仏は責任を果たす時だ。国連事務総長と共に、プーチン氏の過ちを正す粘り強い調整を尽くしてほしい。日本やドイツを含む各国も外交力が問われている。」



モスクワで2022年5月9日、第2次世界大戦の対ドイツ戦勝記念日の軍事パレードで演説するロシアのプーチン大統領。スポーツニク提供=AP

○今朝の産経新聞主張『プーチン氏の演説 侵略正当化は容認できぬ』も以下に転載させて頂く。「ロシアのプーチン大統領が9日、モスクワで開かれた第二次世界大戦の対独戦勝記念日の式典でウクライナ侵略の正当化を図る演説を行った。到底容認できない。プーチン氏は北大西洋条約機構(NATO)がロシアにとって安全保障上の脅威になっていたと強調し、ウクライナ侵攻について「軍事作戦は避けられず、唯一の正しい選択だった」と述べた。だが、独立主権国家のウクライナへロシア軍が攻め込んだことこそが国連憲章違反の侵略に当たる。NATOの拡大を懸念したからと言って侵略を正当化することはできない。演説でプーチン氏はナチスドイツとの戦いとウクライナ侵攻を重ね合わせた。親露派民兵やロシア軍兵士に対し「祖国の未来」のため

ナチスが復活しないために戦っていると鼓舞した。だが、ロシア軍に国土を蹂躪され無辜の民が殺傷されているウクライナをナチス呼ばわりするのは常軌を逸している。ウクライナのゼレンスキー大統領は8日、「第二次大戦から数10年過ぎ、闇がウクライナに再来した。(ナチスとロシア軍の)制服や標語は異なるが、血塗られたナチズムが(ロシアによって)ウクライナで再建された」と述べ侵略者を非難した。ゼレンスキー氏の言葉のほうの説得力がある。ロシア軍は占領地でウクライナ国民を虐殺した。原子力発電所を砲撃した。民間人しかいない避難所を爆撃し、居住地へのミサイル攻撃を繰り返している。全て国際人道法に反する戦争犯罪だ。さらに懸念すべきは、プーチン氏が「キエフ(キーウ)では核兵器使用の可能性も口にされた」と語ったことだ。核兵器を放棄したウクライナがひそかに核攻撃をねらっているとでも言うのか。作り話を口実にロシアがウクライナを核攻撃する恐れは排除できず警戒が必要だ。軍事パレードでは天候不順を理由に軍用機の飛行が中止された。ただ事前のリハーサルでは、プーチン氏が乗って核戦争を指揮する「終末の日の飛行機」と呼ばれるイリュージョン80が飛行した。世界に向けた核恫喝である。いつまでウクライナを世界を苦しめるつもりか。プーチン氏は全ロシア軍を撤兵させ謝罪と賠償に応じるべきだ。」

- 今朝ほど文春オンラインが配信した『NHK職員が前田会長の“強引な改革”に猛反発 若手・中堅職員が次々と退局』なる記事を転載させて頂く。「NHK職員有志が「文藝春秋」6月号で「前田会長よ、NHKを壊すな」と題したレポートを発表する。2020年1月の就任以来「スリムで強靱なNHK」をキーワードに前田会長が推し進めてきた改革の弊害を記し、改革の中身を「強権的で杜撰」と批判している。レポート発表の動機について職員有志は次のように記す。「NHKとは受信料で成り立つ、国民にとっての共有財産であると信じています。公共放送であるNHKは決して国のものではなく、職員、前田会長の所有物でもありません。このまま前田会長による身勝手な改革を進めれば、NHKは必ず崩壊します」職員有志は30代から50代後半の10数名で、所属は番組制作局、報道局など多岐にわたる。職員有志によると、現在NHKでは若手・中堅職員が次々と退局しているという。「ついこの前も将来を嘱望されていた女性記者が、今の状況に嫌気がさしてヤフーに転職してしまいました。ネット業界にうつったり、商社や不動産など異業種に飛び込んだり。前田会長のもとでは未来が描けないとNHKに見切りをつけているのです」前田会長の改革による悪影響は人事、組織だけではなく、「番組制作」の現場にまで及んでいるという。「**会長特命プロジェクト**」が**番組の打ち切りを検討**「前田会長は会長特命プロジェクト」と呼ばれる直轄チームを立ち上げ、改編を担うはずの編成局を差し置き、番組の打ち切りを検討。長年愛されてきた番組が会長とごく少数の人間によって潰されています。『ガッテン!』や『バラエティー生活笑百科』など、長寿番組が突然の打ち切りとなり、職員の心を挫いています。27年続いた『ガッテン!』は最近も10%を超える高視聴率の番組です。現場のスタッフは会長に『せめて不定期で放送させてください』と食い下がりましたが、前田会長が理解を示すことはなかった」大晦日の「紅白歌合戦」も例外ではない。『紅白』も打ち切りになる方向で進められています。すでに前田会長は執行部に『終わらせる』と話しているそうです。昨年も前田会長による激しい介入があり、紅組白組の対抗形式を廃止するよう指示。抵抗した現場は苦し紛れに『カラフル特別企画』を入れていました」「文藝春秋」編集部が前田会長本人に事実確認をしたところ、番組介入について「個々の番組に直接指示することはない」としたうえで、紅白歌合戦の打ち切りの話は「番組全部を見直すだけで、変えるかもしれないが、やめるとまでは言っていない」と答えた。「文藝春秋」掲載の10ページに及ぶレポートでは、人事の混乱、番組介入、誤報など、前田改革による弊害を詳細に伝えている。「文藝春秋」編集部／文藝春秋 本年6月号」

[2022年5月11日(水)]

- 今朝の朝日新聞社説『地質に親しむ 大地に関心、変わる風景』を以下に転載させて頂く。「ふだん気にとめなくても「地質」は災害や開発など日々のくらしと深く関わっている。表土の下にどんな岩石や地層があるかを示す地質図は、地図と同じく国土を把握するための基本データといえる。その地質図を作成する国の機関が産業技術総合研究所の地質調査総合センター(GSJ)だ。前身の旧地質調査所の設立から、今年で140年になる。日本で初めて広域的な地質図ができたのはその6年前で、完成した5月10日は「地質の日」と定められている。これを機に、足元に広がる世界をのぞいてみてはどうだろう。地質調査の歴史をたどると、その時どきの社会の様子や課題が浮かび上がる。最初は「富国」をめざして石炭などの資源の探査が目的だった。第2次世界大戦の頃は軍需省の所属に。戦後は海洋地質の調査や地熱開発、最近では地震を引き起こす活断層や過去にあった大津波の解明などで注目を集めた。気候変動対策として、二酸化炭素を地中に貯留する技術への貢献も期待される。ところが、全国の地質図の整備はなお途上にある。「20万分の1」のものは2010年に完成したが、精度が高い「5万分の1」は、国土の76%程度しかカバーできていない。専門家が実際に現地を歩いて調べる必要があり、手間がかかるからだ。GSJは近年、地下利用の頻度が高い都市圏の地層分布を立体的に



示す地質地盤図を続けて作成し、先月には火山噴火が起きた時の推移を予測して被害の軽減を図る「火山灰データベース」を公開した。いずれも長年の蓄積に支えられたものだ。ただちに役に立たなくても、地道な整備を怠ればこうした果実を受け取ることはできない。そのためにも野外調査ができる人材の育成に取り組む必要がある。ところが地質学は地味な学問で、大学での学生の人気は同じ地学分野でも宇宙や気象に集まりがちだ。興味を持つ若者が少なければ発展は望めない。高校でも地学の履修率は低く、裾野を広げることが長年の懸案になっている。きっかけはある。大勢の観客を集める恐竜展は地質学抜きに語れないし、地質の話題が豊富なNHK番組「プラタモリ」のファンは多い。2008年に認定が始まった日本ジオパークは46地域に増え、2年前には千葉県内の地層から地質年代のある時期が「チバニアン」と命名され話題となった。住んでいる土地の成り立ちを知ることから始めるのもいい。新たな魅力や隠れた危険がわかり、風景の見え方が少し違ってくるかもしれない。」  
 筆者の場合には、高校時代の理科で「化学」「物理」の次に「地学」を選択したことが、その後の自然災害への興味につながっている。その代わり「生物」を選択できなかった。因みに社会は「日本史」を諦めて「人文地理」を選んだ。どちらも難しい選択であった。



南紀周参見で出会った褶曲構造には心底から感動した。岩石はこんなにも曲がるものだろうか。写真中央や左側に写る黒い野球帽がスケールになっている。(2011年3月撮影)

○AERA dot. が昨日配信した『アホノミクスの大將率いる軍備増強論者たち ウクライナに便乗する不謹慎さに唾然茫然』を以下に転載させて頂きたい。「経済学者で同志社大学大学院教授/浜矩子さんの「AERA」巻頭エッセイ「eyes」をお届けします。時事問題に経済学的視点で切り込みます。\*\*\* ウクライナ情勢が凄惨を極める中で、日本の改憲論者たちが鼻息を荒くしている。ここぞとばかりに軍備増強を主張し、核共有まで言い出している。この便乗行動のあつかましさと不謹慎さには唾然・茫然だ。折しも憲法記念日からほぼ1週間の今、改めて日本国憲法の前文に思いが及ぶ。そこには、次のくだりがある。「日本国民は、(中略)平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」いつ読んでも、この決意表明には胸が打ち震える。他者を信じて疑わず、そこに自分の安全と生存を委ねてしまう。何たる勇氣。何たる清廉。ところがかの安倍晋三元首相は、憲法前文のまさしくこの部分について、「つまり、自分たちの安全を世界に任せますよと言っている」とネット上で指摘した。そしてそのことが「いじましい」「みっともない」という認識を披露している。筆者が至高だと考える決意表明を、アホノミクスの大將は最も忌み嫌っている。これは筆者にとって大いに得心のいく構図だ。彼我のこの認識格差が、アホノミクスの大將の本性をあまりにもよく指し示している。彼が言う「いじましい」「みっともない」は、そのままウクライナ情勢便乗型の軍備増強論者たちにぶつけ返したい。この軍団の先頭に立っているのがアホノミクスの大將その人だ。憲法前文はさらに次のように続く。「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において名誉ある地位を占めたいと思ふ」ウクライナの人々が、今まさに専制と隷従を拒絶し、圧迫と偏狭を跳ねのけようとしている。その人々と連帯し、国々間の信頼に自らの生存を委ねる決意を改めて宣言する。そうしてこそ日本は、共生を目指す国際社会の中で名誉ある地位を占めることができるのである。憲法前文はその終盤部分で「いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならない」とも言っている。便乗軍団は他者を無視するどころではない。他者の不幸を自己正当化のために利用しようとしている。断じて許せない。浜矩子/1952年東京都生まれ。一橋大学経済学部卒業。前職は三菱総合研究所主席研究員。1990年から98年まで同社初代英国駐在員事務所長としてロンドン勤務。現在は同志社大学大学院教授で、経済動向に関するコメンテーターとして内外メディアに執筆や出演。※AERA 2022年5月16日号



浜矩子 / 経済学者,同志社大学大学院教授

[2022年5月14日(土)]

○今朝の朝日新聞天声人語『戦争とムーミン』を転載させて頂きたい。「第2次世界大戦中のフィンランドは、隣国ソ連から侵略され、独立を守るためナチスドイツとも手を結んだ。そんな時代に翻弄されたのが、若きトーベ・ヤンソンだった。後にムーミンの物語を世に出す女性は戦争への憎しみを書き記した。▼「どこもかしこも戦争…最近あまり言葉も出てこない…国全体が抱える苦悩というものが私を圧迫し、バラバラにし爆破されるような恐怖感に襲われる」。救いを求めるように不思議な物語を紡いだ。▼初期の作品にある家族の離散や失望は、戦争がテーマになっているとボエル・ウェスティン著『トーベ・ヤンソン』にある。

悲惨な経験の先に物語が生まれたように、戦後のフィンランドも新たな外交を形作った。中立化である。▼大国の争いの外に身を置く。そんな方針の下、ソ連との友好を保ちつつ西側との関係も築いた。冷戦終結後は欧州連合の一員になったが、軍事同盟の北大西洋条約機構(NATO)には加わらなかった。しかしそんなバランス外交はもう終わりにするという。▼フィンランド大統領がおととい、NATOへの加盟を申請すると表明した。ウクライナ侵攻の後、中立より同盟を望む声が国内で高まったからだ。ロシアの行動は西側の動揺を誘うどころか、逆の効果を生んでいる。▼加盟が実現すれば、ロシアとNATOが接する国境は2倍以上に延びる。歪んだ被害者意識をロシアがますます強めないか。懸念が重なるばかりの欧州情勢に、ムーミン谷の穏やかさはない。」  
☞ かつて帝政ロシアに苦しめられていたフィンランドの復活は、シベリウスの『フィンランディア』を聴くと非常によく理解できる。隣国からの重圧に耐えながら、いつしかそれを跳ねのけ、自由を取り戻した喜びがよく表現されているからであろう。ウクライナにも是非そうあって欲しいと願っている。一方のロシアにも、チャイコフスキーの『スラブ行進曲』の中に、重苦しい苦難に耐え忍んだスラブ民族の矜持がよく表れていると思うのであるが、その矜持はいったい何処へいったしまったのだろうか。

[2022年5月15日(日)]

○今朝の朝日新聞社説『沖縄復帰50年 いったい日本とは何なのか』を以下に転載させて頂く。「連載「街道をゆく」で各地を旅した作家・司馬遼太郎氏が沖縄を訪れたのは1974年4月だった。沖縄の1年のうちで最も過ごしやすい「うりずん」と呼ばれる季節だ。だが司馬氏は物思いに沈む。見聞きする断片のどれもが「そり立つようにして自己を主張して」おり、「一体、日本とは何かということ、否応なく考えこまされてしまう」と書いている。当時の沖縄には、いま以上に特有の文化や風景が残っていたに違いない。それらは本土とは少し異なり、同時につながりも感じさせ「日本」のイメージの修正を迫る。沖縄が日本に復帰して、きょうで50年を迎える。島の置かれた状況を見ると、司馬氏と同じ言葉を違う意味で繰り返さなければならない。いったい日本とは何なのか——と。■**日米両国のはざま**で 復帰の日を日本は4月1日にしたいと望み、米国は7月1日を主張した。間をとった「5月15日」になったことは、両国に翻弄され続けてきた沖縄の歴史そのものに見える。戦争中は本土決戦までの「捨て石」とされ、戦後は米軍の統治下に置かれた。日本は憲法9条を掲げる一方で、国土の防衛を米国に頼ることを決め、直前まで「統治権の総攬者」だった昭和天皇は「琉球諸島の軍事占領の継続を望む」とのメッセージを米側に伝えた。米軍は県内に多くの基地を建設し、あわせて住民の反対運動などで本土を追われた部隊を次々と沖縄に移転させた。自らの意思と関係なく、他人に物事を決められてしまう境遇から脱したい。基地を「本土並み」に減らしたい。それが復帰を迎える沖縄の願いだった。現実とは違った。負担はいつそう重くなった。国土面積の0.6%の島に米軍専用施設の7割が集まる異様な姿は、復帰後に「完成」した。「銃剣とブルドーザー」で住民の土地を奪い、軍政の最高責任者が「沖縄の自治は神話である」と言い放つ。そんな異民族統治は確かに終わった。だが日本国民が選挙によって国政を託した政府の行いも、本質において変わるところがなかった。そう言わざるを得ない。機動隊や警備船を繰り出し、県民が何度「ノー」の意思を示しても聞く耳を持たず、情報を隠し脱法的な手法も駆使して異議申し立てを抑え込む。辺野古の海の埋め立てをめぐって国が現にやっていることだ。沖縄はずっと基地負担の軽減を訴えてきた。2010年ごろからは「本土による差別」という指摘が加わった。「甘えているのは沖縄ですか。それとも本土ですか」翁長雄志前知事が生前に放った、矢のような言葉である。■**「ひめゆり」の懸念** これに対し、本土は「慣れ」というよろいを厚くして、そこに逃げ込もうとしているように映る。難題から目をそらし、沖縄の犠牲の上で平和を享受してきた戦後の歩みを忘れたかのように「安全保障のためだから仕方ない」「いつまで不満を言っているのか」と突き放す。最近では声をあげる沖縄を中傷・攻撃する言説も飛び交う。気になる数字がある。沖縄の米軍基地を今後どうするのがよいかを聞いた朝日新聞の全国世論調査の結果だ。10年前は「いまのままでよい」が21%、「縮小」「全面的に撤去」が計72%だった。調査方法などが異なるため単純に比較できないが、今年は現状維持が41%とほぼ倍増し、縮小・撤去の計52%に迫る結果となった。沖縄戦でひめゆり学徒を率いた仲宗根政善氏は復帰を前に日記にこう書いた。「10年後に本土並みの基地になるのか20年後になるのか、全く予測はつかない。悪くすると半永久的にならないとも限らない」予言が現実味を帯びる。それが復帰50年の到達点とすれば、いったい日本とは何なのか。■**首相の言、果たす責任** 「日本の政府はあらゆる方法をもって琉球を利用するが、琉球の人々のために犠牲をはらうことを好まない」。米国の歴史学者G. H. カー氏の1953年の著作の中の言葉だ。



沖縄復帰記念式典であいさつする佐藤栄作首相  
=1972年5月15日、東京・九段の日本武道館



一面の真実を言いあてたものと沖縄では受け止められてきた。違うと言うのであれば、行動で示さなければならぬ。近年の中国の軍事力の伸長を受けて、米国は大規模な基地に依存するのは危険と考え、部隊を分散配置し、機動的に展開していく戦略への転換を進めている。県の有識者会議は昨年この機をとらえて沖縄の米軍を県外に移転させることは可能とする報告書をまとめた。50年前の復帰記念式典で、佐藤栄作首相は「今日以降、わたくしたちは同胞相寄って喜びと悲しみをともにわかちあうことができる」と述べた。この言葉をウソにしてはならない。責任は本土の側にある。」

[2022年5月16日(月)]

○今朝の朝日新聞天声人語『か・き・つ・ば・た』を転載させて頂く。「くからころも 着つつなれにし つましあれば はるばる来ぬる 旅をしぞ思ふ」鮮やかな水辺の花を見た平安歌人の在原業平は「か・き・つ・ば・た」の5音を歌に織り込んだ。場所はいまの愛知県知立市八橋町である。▼妻を思い、旅のわびしさを詠んだ一首は『伊勢物語』に収められた。その後、多くの歌人俳人が八橋を訪れ、浮世絵にも描かれた。愛知の県花にもなった。▼「八橋の誇りですが、ちゃんと咲かせなきゃと重圧も感じます」八橋旧跡保存会の平沢信幸会長(75)の言葉にはわけがある。無量寿寺境内のカキツバタ3万株を5年前「立ち枯れ病」が襲ったのだ。「がっかりしたお客さんに申し訳なくて、県市と対応を練りました」▼水質が疑われれば新たに井戸を掘り土質が怪しければ近くの田から土を運ぶ。悪性のカビには手作業で1株ずつ殺菌剤をまいた。奮闘が実り、今春は全盛期の8割に回復。筆者が訪れた先週、池一面が青紫に染まっていた。▼業平といえどどうしても浮名を流す貴公子の像が浮かぶ。権勢の道から外れても、和歌の才にたけ六歌仙に数えられた。取材では業平の艶聞も話題に上ったが、平沢さんらの関心は彼が詠んだ花の美を復活させる方面に注がれていた。▼吉野の桜に水戸の梅、最近ではウクライナのヒマワリ畑。詩文や映画を通して土地と深く結ばれた花は多い。どれも同じ花を守り抜く苦勞あってこそ。年々歳々カキツバタを育ててきた人々に感謝しつつ、にぎわう寺を後にした。」

[2022年5月17日(火)]

○今朝の読売新聞『新幹線耐震化, JRに前倒し要請へ…運賃への転嫁を容認』を以下に転載させて頂く。「今年3月の福島県沖の地震による東北新幹線の長期運休を受け、国土交通省はJR各社に新幹線の耐震補強計画の前倒しを要請する方針を固めた。耐震化はJR東日本の東北、上越、JR東海の東海道、JR西日本の山陽の4新幹線で進められており、工事促進のため費用を新幹線の乗車代金に上乗せし利用者に転嫁することを認める方針だ。5月中にも有識者会議を設置して検討を始める。国交省は1995年の阪神大震災を機に、震災前の「旧基準」で建設された新幹線の耐震化を各社に要請してきた。しかしその後、補強の対象範囲を拡大したこともあり、25年以上が経過した今も完了しておらず、国交省は、各社に任せてきた計画の前倒しを求める必要があると判断した。特に今回の地震で高架橋の被害が出た東北と上越の耐震化率は、高架橋が66%、電柱が11%と遅れている。工事費の負担が対策の遅れの要因の一つとされることから、費用捻出も支援する。各社が算出する今後の耐震化に必要な費用を、乗車代金に上乗せして賄うことを認めることを検討する。国交省の通達では、乗車代金の値上げは鉄道事業全体の収支が赤字の時に限ると定めているため、これを緩和する。鉄道事業法では乗車代金の上限の設定・変更は事業者が申請して国が審査する認可制で、実際に上乗せするかは各社の判断に委ねる方針だ。国交省は近く設置する有識者会議で、各社に求める計画の前倒し幅などを議論する。また、既に設置している鉄道運賃・料金に関する有識者会議で費用の上乗せ方法について検討する。最大震度6強を観測した、3月16日の福島県沖の地震では、補強前的高架橋や電柱の損傷などで東北新幹線の福島―仙台間が29日間運休した。全面再開までの期間は、2011年の東日本大震災以来の長期になった。東北新幹線は昨年2月にも地震で11日間運休した。」

☞ 関連の資料が本サイト“東日本大震災関連のトピックス”に掲載されているので参照したい(本年4月1日編集, <http://sismosocial.web.fc2.com/higashinihon.html>) 1995年兵庫県南部地震以前に信じられていた“新幹線安全神話”はその後、幾多の被害地震によって覆されてきた。耐震化工事はもちろん必要であろうが、3月の脱線事故について新聞は「けが人がいなかったのが奇跡のように思える。駅に近づき減速していたところに非常ブレーキがかかったようだ」と報じている。このような幸運に安堵することなく、ここからどのように“最悪の事態”を想定出来るのかが、本当は問われているのであろう。



各新幹線の耐震化の状況

	対象箇所数	
	高架橋	電柱
東北・上越	5万5000本 (66%)	2万本 (11%)
東海道	1万9600本 (ほぼ完了)	190本 (100%)
山陽	3万5100本 (98%)	2500本 (41%)

※2022年3月時点  
カッコ内は耐震化率



[2022年5月18日(水)]

○今朝の朝日新聞天声人語『鉄の街よ』を以下に転載させて頂く。「黒海の北にあるアゾフ海は、世界一浅い海として知られる。最深部でも14mしかなく、チョウザメなどの漁が盛んだ。18世紀、その北岸に美しい街が築かれロシアの女帝は「マリアの街」と名付けた。▼マリウポリである。ウクライナ有数の工業都市を支えてきたのは「アゾフの鉄」を意味する巨大製鉄所「アゾフスターリ」だ。冷戦下、ソ連は核攻撃に備えてシェルターを整備。地下深くを迷路のようなトンネルで結び、数万人を収容できる要塞都市が出現した。▼この2月まで名を口にしたことすらなかったその街を、いま世界が注視する。ロシア軍は避難住民ごと製鉄所を包囲。「太陽が見たい」、「生き残りたい」。薄暗い地下室で暮らす子どもたちの言葉にこちらまで不安に包まれた。▼製鉄所が黒煙に覆われ、花火のように焼夷弾が降り注ぐ。戦果を誇示するロシア側の公開映像はテレビゲームのようで現実感がない。兵士であれ民間人であれ、その下に身を潜める人たちの絶望を思わざるをえなかった。▼「アゾフスターリを救って、いますぐ」欧州を熱狂させる国別対抗歌謡祭ユーロビジョンで先週末、ウクライナ代表の6人組が呼びかけた。優勝を決めた歓喜の舞台での悲痛な叫びだった。▼願いもむなしくアゾフの鉄は包囲軍の手に落ちたか。歌謡祭の慣例では翌年は優勝国での開催が原則と聞く。ウクライナのどこかの街で、1年後に欧州各国語の歌声が響くさまを頭に描こうと努めた。どうしても焦点を結ばなかった。」



東京新聞 2022.5.18. より

○今朝の東京新聞に掲載された佐藤正明氏の風刺漫画『叫び』を右に転載させて頂く。いつもながらの出来ばえに感じ入るばかりである。

○東京新聞夕刊に掲載された『海を飛び出し、広大な野菜畑を泳ぐカラフルな「魚」三浦半島に出現』を以下に転載させて頂く。「野菜畑に魚が！初夏の海風が渡る神奈川県三浦半島。先端にある三浦市で夏野菜の栽培が始まった。市内南部を上空から見ると、広大な畑地にパッチワーク模様が広がり、その一部がカラフルな魚のように見えた。三浦市は三方を海に囲まれている影響で冬暖かく夏涼しい。その特色を生かした露地野菜の栽培が盛んで、ダイコンとキャベツの出荷量は全国トップクラスだ。「畑を泳ぐ魚」の胸びれ部分の赤色の畝は寒冷紗(かんれいしゃ)と呼ばれる作物を覆う資材。害虫の「アザミウマ」が赤色を嫌うそうだ。背中あたりの薄黄色は収穫を終えたキャベツ畑だろうか。作業のしやすさや水はけなどにより、畑の区画ごとに畝の方向が違うのも特徴的で面白い。ヘリから眺めると、海岸線のすぐ際まで畑が広がっている様子がよく分かる。この魚は元気が良すぎて海から飛び出しちゃったのかな、とメルヘンチックな気分になった。(写真と文・由木直子)」



夏野菜の栽培が始まった広大な畑。パッチワーク模様の一部が魚のように見える＝神奈川県三浦市で、東京新聞社ヘリ「あさづる」から

[2022年5月19日(木)]

○今朝の朝日新聞天声人語『兵士よ、君は人間だ』を以下に転載させて頂く。「舞台は架空の国トメイニアの宮殿。支配者ヒンケルが陶然とした表情で、地球儀を模した特大の風船をもてあそぶ。チャプリンの映画「独裁者」は世界征服の野望に取りつかれた男の狂気を描く。▼ヒトラーを想起させる権力者と、うり二つの理容師をひとりて演じ分けた。実際の喜劇王はヒトラーと生まれ年が同じで、チョビひげまでそっくりだった。撮影開始は1939年秋。ナチスが隣国ポーランドに侵攻してわずか8日後のことだ。▼評伝『チャップリン』(大野裕之著)によれば、当時、ヒトラーは大恐慌を切り抜けた指導者として多くの国々で称賛されていた。映画制作を思いとどまるよう説く大量の手紙が彼のもとに届いたという。しかし1940年に米国で封切られ、大ヒットする。▼「いまこそ新しいチャップリンが必要だ」仏カンヌ映画祭の開幕式で、ウクライナのゼレンスキー大統領が言及したのはこの作品である。「1940年の映画の言葉に耳を傾けなければならない」と述べた。▼何十年ぶりかに作品を見直してみた。物語終盤、トメイニア軍が隣国オスタリッチに攻め込み、首都を制



庄. ひょんなことから、独裁者と入れ替わった理容師が大観衆の前で演説する羽目に。「独裁者は死ぬ」「兵士たちよ、けだものに身を委ねるな。君たちは機械でも家畜でもない。人間なんだ」▼不朽の名作、不滅の名演説と言うべきだろう。大義なき戦闘に駆り出された最前線の若者たちに、この言葉を届ける手立てはないものか。」

2022年5月19日 文責：瀬尾和大